

主 題：偽教師たちに惑わされるな③ 彼らをさばかれる主
 聖書箇所：ユダの手紙 8-10節

ユダの手紙をお開きください。「過去の失敗から学べ」と、まさに、これがユダが伝えたかったことです。ユダは、偽りの教師たち、偽りの預言者たちに例外なく下った神のさばきを、今一度、読者たちに思い起こさせることによって、偽りに惑わされてはならないという警告を發しました。また同時に、偽りが必ず入り込んで来るから、神の真理にしっかり立ちなさいという励ましも与えました。また、恐らく、このような過去のさばきを明らかにすることによって、この偽りの教師たちに対しても「目を醒ますように」と、そして、偽りから離れて真理に立つことを期待もしていたはずですが、しかし、悲しい現実には、偽りの教師たちは偽りから離れることなく、人々を惑わし続けていました。

その嘆きがこのユダの手紙には溢れています。今日、私たちは8節のところから見ていきますが、8節には「それなのに、この人たちもまた同じように、…」と書かれています。「それなのに、」とは「このようなことがあったにもかかわらず」ということです。「このような神の審判が神に逆らう者たちに下ったにもかかわらず、彼らは同じように…」と、まさに、過去のさばきを受けた人たちと同類である、彼らと同じことをしているとユダは嘆いています。教会の中に入り込んで来たこの偽教師たち、すでに、私たちは4節のところから彼らの本性を見ました。ユダはそれを見事に暴いています。三つのことを挙げています。彼らは(1) **不敬虔な者たちである**。神を敬うことも礼拝することも、神を恐れて生きることもしなかったと。自分たちの快樂のままに生きているのです。(2) **神の恵みの真理を曲げていた**。罪の中を歩み続けて行くためにそうしていたのです。自分たちの都合のいいように神の真理を曲解していたことを教えていました。(3) **主イエスが神であることを否定していた**。教会の中に入り込んで来た者たちは、立派なことを語っているかもしれない、立派な振る舞いをしているかもしれない、あたかも、立派な信仰者であるかような姿であるかもしれない。でも、実際は彼らはこのような者たちであると、ユダは彼らのことを明らかにするのです。そのことを明らかにしたユダは、過去に彼らと同じようであった人々にくだったさばきを明らかにしました。

そして、今日見ていく8節から、彼らの生きざまを乱しているその理由について、なぜ、彼らはこのような生き方をするのか？なぜ、彼らは偽りを持ち込むのか？そのことを明らかにしています。

☆偽教師たちの生き方、彼らの本質とは？

1. 夢見る者

8節「それなのに、この人たちもまた同じように、夢見る者であり、肉体を汚し、権威ある者を軽んじ、榮えある者をそしっています。」、彼らは「夢見る者であり」と言っています。「夢見る者」ということばは新約聖書に2回しか出て来ていません。この箇所ともう一箇所は使徒の働き2章です。ペンテコステの出来事の際に、人々がそれぞれの国のことばで話し出したとき、それを見ていた人たちは「彼らは酒に酔っているのではないか」と言って、その状況を理解できませんでした。そのときにペテロが話したことばの中にこの「夢見る者」ということばが出て来るのです。2：17でペテロは旧約聖書のヨエル書の預言が成就したことを明らかにしました。『神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。』と。ペテロが言いたかったことはこういうことです。まさに、聖霊がすべての信仰者に注がれる、これはヨエルによって預言されていた預言の成就であるということです。もちろん、完全に成就しているわけではありません。患難時代にそのことは成就していくのですが…。ペテロがペンテコステのときに語ったのは、神は夢という方法によってご自身のみこころを啓示されたということです。私たちは「夢」というと眠っているときにみる夢を連想しますが、ここで言われていることは、神は確かに神の真理を夢を通して明らかにされたことです。特に、初代教会においてそのようなことが起こったというのは、まだ、彼らの間にみことばが完成していなかったからです。今はそういうことはありません。今、私たちは神のみこころを知りたいなら、夢に期待するのではなく、みことばに期待します。なぜなら、このみことばの中に神の啓示がすべて記されているからです。

そうでないときには、神はいろいろな方法をもってご自身の真理を明らかにして来られました。「夢」もその一つだったのです。ですから、「使徒の働き」の中でペテロが語った「夢」とユダ8節に見る「夢」は、同じことばが使われていてもその意味は全く違います。使徒2：17は神が夢を通してご自身を啓示されたことですが、ユダ8節で、ユダが「夢見る者」と言った偽りの教師たちの様子は、自分たちが眠っている間に見る夢がまさに神から与えられたものだ、これは神からの啓示であると信じているので

す。ですから、彼らは神のみことばよりも自分たちが見た夢の方をより重視しているのです。そこに問題があったのです。だから、彼らは彼らの信仰においても教えにおいても、これは神の啓示だとして自分たちの夢を語るのです。大変大きな問題だということが分かります。

ですから、彼らが語っていることは、神が私たちに与えてくださっている啓示とは全く相反するものです。偽りの教師たちの問題点は、神の啓示でないこと、彼らはただ夢を見たに過ぎないのに、その夢をあたかも神のメッセージだと信じて語っていることです。この「夢見る者」という動詞は現在形を使っています。彼らはこのように歩み続けていたからです。

実は、このようなことを語っている人たちは今の時代でもいるのです。夢を見たがそれは神が啓示をくださったと。大変危険なことです。繰り返しますが、この聖書のことばに何も加えてはならないし、また、除いてもいけない。今、私たちがいただいているみことばは神が私たちに与えてくださった啓示のすべてです。私たちに神が伝えようとしたメッセージがここに記されているのです。ですから、もし、だれかが皆さんに「私は夢でこういう啓示を受けました」と言うなら、それは聖書が教えていることとは違います。そういう方法で神はご自身のみこころを明らかにすることはしないのです。

このように考えると、私たちは何度もこのユダの手紙を通して学んで来ましたが、私たちが聞いていること、読んでいる内容、それは本当にみことばの通りであるかどうか、本当にみことばが正しく語られているのかどうかを吟味する必要があると思いませんか？何でも信じて良いわけではないのです。神が言っていないことをあたかも神からのメッセージであるように、偽りの教師たちはどの時代にあってもどの場所であっても語り続けます。だから、私たちはそれが本当に聖書通りなのかを吟味しなければなりません。

イエスが私たちに与えてくださった「大命令」は、皆さんがご存じのように「弟子を作りなさい」ということです。すべてのクリスチャンたちにその命令が与えられています。つまり、あなたにその命令が与えられているのです。「弟子作りとは何か？」、簡単に言うなら「伝道と教化」です。私たちはイエス・キリストの福音を伝え、そして、救いに与った人たちをみことばによって養っていきます。これはすべての信仰者に神が命じておられる働きです。私たちは福音のメッセージを語る時に、正しく神の福音を語ることが責任だということを忘れてはならないのです。どんなにその人が救われて欲しいと願っても、私たちは福音を水で混ぜて神のメッセージでないものを語ってはなりません。神がおっしゃること、厳しいなと思うでしょう、永遠のさばきを語るというのはみんなが聞きたくないかもしれない。でも、私たちの責任は神が語れというメッセージを語るのです。神のみわざを信じて…。そして、彼らが救いに与ったなら、私たちは彼らを神の正しいみことばをもって教え養っていくのです。神が与えてくださったみことば、神が私たちに与えてくださった啓示、それはこの聖書だけです。ですから、私たちはこの聖書が神からのメッセージであるゆえに、このみことばの権威を認める必要があります。そして、その権威を認めるだけでなく私たちはそれに従って行くことが必要です。宗教改革者たちが戦って来たように、私たちもみことばの真実さとその権威のために戦い続けていくことが必要だということ言うまでもありません。

パウロの遺言と言われているⅡテモテの中で彼は「みことばを宣べ伝えなさい」という命令を伝えました。継続してみことばを語り続けていきなさいと。なぜ、そんなことを彼が警告したのか？そのことをチャレンジしたのか？彼はこれからの時代がどうなっていくのかを知った上でこのメッセージを与えていたのです。Ⅱテモテ4：2-4「2 みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。3 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、4 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。」と。

これから教会は益々自分たちが聞きたいことを語ってくれる教師たちを集め始めるということです。聞きたくないこと、自分たちが聞いていて耳が痛いとか、心刺されるとか、そういうことを語らない人たち、そういう人たちを教師として集め始めると言います。だから、私たち教師の役割というのは、人々が聞きたいことを語るのではなくて、人々が聞かなければならないことを語る必要があるのです。それは教会の教師であっても、長老たち、日曜学校の教師であっても、一人ひとりの信仰者も同じことです。私たちの責任は神のメッセージを正確に伝えて行くことです。そして、今パウロが言ったように、そういう時代を私たちが迎えているということは言うまでもありません。まさに、彼らは自分たちの夢が神からの啓示であるように信じて、そのようなことを信じ教えていたのです。だから、彼らは偽りの教師たちなのです。

2. 偽りの教師たち、夢見る者たちの生き方の特徴

偽りの教師たちの本質を改めて暴露したユダは、だから、彼らはこのような生き方をするのだと、三つの生き方を示していることに皆さんお気づきになると思います。8 b 節「…肉体を汚し、権威ある者を軽んじ、栄えある者をそしっています。」

1) 肉体を汚し : この「肉体」とは「からだ」のことです。罪の性質というよりも「からだ」のことです。「汚している」とは「染める、別の色に着色する」、そして比喩的に「汚す、汚染する、墮落させる」という意味があります。新約聖書の中に5回出て来るのですが、その中の1回は「教えを破ることによって汚れた者になって、過ぎ越しの食事が食べられなくなってしまう」と、ヨハネの福音書18章で使われています。18:28「さて、彼らはイエスを、カヤパのところから総督官邸に連れて行った。時は明け方であった。彼らは、過越の食事が食べられなくなることはないように、汚れを受けまいとして、官邸に入らなかった。」と。これはイエス・キリストのさばきのときです。みことばの教えに逆らうことによって汚れた者になってしまっただけでこの食事に就くことができない、だから、汚れまいとしていたということです。後の4回は「道徳的な汚れ、罪に染まっていく」という意味で使われています。ユダが教えていることは、彼らは夢見る者たちであって、自分のそのからだを汚していたということです。彼らが生活をしてきた目的、その歩みの動機を次のように要約することができます。それは「自分の肉欲を満たすことしかない。自分の情欲に引かれて、自分の汚れた欲を何とか満たそうとしている」と。そのような様子です。

Ⅱペテロ2:10は今日何度も見ますが、ユダと非常に類似したことをペテロも教えています。「汚れた情欲を燃やし、肉に従って歩み、権威を侮る者たちに対しては、特にそうなのです。彼らは、大胆不敵な、尊大な者たちで、栄誉ある人たちをそしって、恐れるところがありません。」と。まさに、ユダが教えたその通りです。肉体を汚している者たち、彼らは汚れた情欲を燃やして肉に従って生きています。パウロがテサロニケの人たちに手紙を送った時に「神のみこころはあなたがたが聖くなること」と言いました。「聖くなること」を教えるために、このような歩みをしてはならないと教えます。Ⅰテサロニケ4:3-5「:3 神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。あなたがたが不品行を避け、:4 各自わきまえて、自分のからだを、聖く、また尊く保ち、:5 神を知らない異邦人のように情欲におぼれず、」と書かれています。

この人たちは自分の快樂のままに生きています。自分の肉の欲するままに生きています。神のみこころなどどうでもよかった。彼らの考えていること、もちろん、それは表面的には見えないかもしれませんが、内側はそのように自分の欲を満たすことだけ、その情欲に引かれて生きていたのです。

2) 権威ある者を軽んじ : この偽りの教師たちはどのような歩みをしてきたのか？ユダが教える二つ目は「権威ある者を軽んじ」ていました。「権威ある者」とはだれのことでしょう？社会的に権威のある人なのか、教会という世界において権威ある人たちのことを言っているのでしょうか？このことばの元になっているのは「主」と訳せることばです。このことばは「支配する力、支配」という意味があります。恐らく、ユダが言わんとしたことは、主イエス・キリストに対する反抗、彼の権威を認めようとしないことです。「軽んじる」ということばは「拒んでいる、敵対する、反抗する」ということです。ですから、彼らは私たちの主である神を拒み神に敵対し、神に反抗して生きていたのです。なぜ、そのように言えるのか？もうすでに4節で見たように、彼らはイエス・キリストを否定する者たちです。イエス・キリストが神であることを信じていないゆえに、彼らはイエス・キリストに従おうなどと思いません。まさに、これは救われる前の私たちの姿そのものです。

皆さん、私たちはみことばを通して教えられたように、私たち人間は神に従うものとして造られました。私たちがイエスを信じた時、イエスに従う決心をしたとき、その決心は何だか自由が奪われていやだなと、何となく損をするような感じを覚えるのでしょうか？そうではなくて、私たちはみな例外なく神に従う者として造られたのです。私たちは生まれながらに神に従っていない、つまり、神に対して罪を犯しているのです。真の神ではなく神でないものに従って生きています。だから、神に従っていくのかサタンに従うのかのどちらでしかないのです。本来なら、私たちは神に従う者として造られたのに、私たちの選択は神ではなくてサタンに従う選択をして来たわけです。

その結果、私たちは何の自由もなかった。私たちは罪の奴隷として罪を犯すことしかできなかった。イエスを信じることによって、イエスに従う選択をして従っていくときに、私たちには選択ができたのです。神に従っていくのか、肉に従うのか？と。初めて、私たちは自由をいただいたのです。この人たちの問題は、主であられるイエスを信じないだけでない、彼らはその権威も拒んでいるのです。私の人生だからだれにも指図されたくない。「これは私の人生なのだ。主が何と言おうと私はそれに従わない。」と、まさに、先ほど言ったように、救われる前の姿そのものです。救われる前の私たちは、自分の思い通りに生きています。神に従う者として造られたのにも拘わらず、私たちはそのことを拒み自分の好きなように生きて来たのです。まさに、ここで見る偽教師そのままの姿です。だから、彼らは救われてい

ないのです。彼らはイエス・キリストを否定するだけでない。彼らはイエス・キリストの権威に従おうともしないのです。

繰り返しますが、あからさまに彼らはイエス・キリストの権威に従わないとしているのではありません。見かけはいかにも従っているかのようなのです。恐らく、彼らはそのことを人々の前でも話しているでしょう。そうでなければだれも騙されないからです。見た目は大変献身的なすばらしい信仰者に見えます。そうでなければだれも惑わされません。彼らが見た人間的な夢を神からの啓示であると語ってそれに騙されることなど有り得ません。ですから、見た目は大変立派な信仰者なのです。だから危険なのです。そこでユダはこうして時間を割いて、そして、スペースを割いてこのことを教え続けているのです。まさに、このような歩みをしている人たちは救われていない人たちであると言います。

詩篇 10 : 3 にこのように書かれています。「悪者はおのれの心の欲望を誇り、貪欲な者は、【主】をのろい、また、侮る。」と。結局、この人々は悪者であり、彼らが誇っているのは神ではないのです。彼らは何を手にしているのか、物です。そこで「おのれの心の欲望を誇り、貪欲な者」と、まさに、神ではなくて欲を満たす者たちは、主をのろっている、主を侮っていると言います。神を軽蔑するのです。この「侮る」ということばは「ひどく嫌う」ということです。神に対してそのようにするのです。未信者の特徴です。救われていない人たちの特徴です。彼らは神を憎んでいるのです。愛していないのです。どちらか分からない？のではありません。神を愛していないのはまさに神を憎んでいる、その証拠に神が喜ばれないことを選択してそのように生きているからです。

詩篇 73 : 11、12 「:11 こうして彼らは言う。「どうして神が知ろうか。いと高き方に知識があろうか。」:12 見よ。悪者とは、このようなものだ。彼らはいつまでも安らかで、富を増している。」、まさに、神を信じていない者たちは、神に従おうなどとは微塵たりとも思っていない。「私の好きなように生きていく」、それがこの偽教師たちの特徴である、このような歩みをしているとユダは教えるのです。

3) 栄えある者をそしり : 「栄えある者」と訳されていることばは「栄光」という意味があることばです。神への称号であったり、文字通りに訳すと「尊厳な栄光」となります。「栄光」「栄え」ということばを考えると私たちは神のことを思います。ユダは 8 節の他にも 24 - 25 節で「:24 あなたがたを、つまづかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、:25 すなわち、私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。」と記しています。ここにも「栄光」ということばが出て来ます。

確かに、8 節で「栄えある者」と言ったときに、これは神のことなのか？と考えます。「栄光」という意味のあることばが使われているからです。でも実は、ここで言われている「栄えある者」とは神のことではありません。「天使たち」のことです。なぜか？同じことばが今見たユダ 24、25 節では「栄光」と訳されていて、8 節では「栄えある」と訳されています。同じことばが使われていてどちらも名詞ですが、24、25 節は単数形で使われ、8 節では複数形で使われているのです。先に見た II ペテロ 2 : 10 「汚れた情欲を燃やし、肉に従って歩み、権威を侮る者たちに対しては、特にそうなのです。彼らは、大胆不敵な、尊大な者たちで、榮譽ある人たちをそしって、恐れるところがありません。」、この「榮譽ある」というところに新改訳聖書の第二版では * 印があって、下の欄外に「御使いたち」と説明がされています。続く 11 節には「それに比べると、御使いたちは、勢いにも力にもまさっているにもかかわらず、主の御前に彼らをそしって訴えることはしません。」とあります。

ユダに戻って、9 節は「御使いのかしらミカエル」のことです。ミカエルがサタンに対してどんなことをしたのか？ II ペテロ 2 : 10 とユダ 8 節は大変類似しています。ペテロの手紙では「榮譽ある人たちをそしって、」とあり、ユダの手紙 8 節では「栄えある者をそしっています。」と書かれています。ですから、少なくとも、この二箇所を見るときに、恐らく、この「栄えある者」とは天使たちのことであると言えます。

3. 偽教師とミカエルとの御使いに対する扱いを比較

ユダの手紙の 9 節には「御使いのかしらミカエル」のことが書かれています。なぜ、ここにこのことが書かれているのか？それは、この偽りの教師たちの天使たちに対する態度と、御使いのかしらであるミカエルの罪を犯した御使いのかしらであるサタンに対する態度の二つを比較しているのです。偽りの教師たちが天使たちをどのように扱ったのかということと、良い天使のかしらであるミカエルが、罪を犯し墮落した汚れた天使たちのかしらであるサタンをどう扱ったのか、そのことを比較しているのです。8 節の「栄えある者」は恐らく天使たちのことですが、偽教師たちは天使たちを「そしっています。」とあります。「そしる」とはだれかに対して「非難する、屈辱的なことを言う」、簡単に言うなら「悪口を言う」ことです。彼らは「ののしり中傷する」のです。そのような態度を取っている、そのようなことを実際に行っているのです。

ユダはここで、私たちは天使を崇拝すべきだと教えているのではありません。天使というのは、神に造られたものであり、特別な役割をいただいています。彼らは神の聖さを守ったり、神の聖さを称えたり、また律法の仲介者として、律法を人々に伝えるために神によって用いられています。また、罪人たちが救いに与ったときには「あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」（ルカ15：10）と記されています。神のメッセージを携えて彼らは遣わされて来ました。主イエス・キリストの誕生の時もそうでした。確かに、神によって選ばれ、そして、神によって用いられるこの天使たち、この天使たちはイエス・キリストが地上に帰って来られるときに、イエスに伴われて帰って来ます。何のために？さばきを行うためです。

マタイ13：49、50には「:49 この世の終わりにもそのようになります。御使いたちが来て、正しい者の中から悪い者をえり分け、:50 火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。」とあります。イエスが帰って来られる時に天使たちを伴って来て、そして、彼らが神に逆らう者たちにさばきを与えると云います。

ですから、こういうことです。ユダもペテロも、彼らは天使たちを崇拝するようにと読者たちを励ましているのではありません。それは偶像崇拝です。でも、天使たちは神によって特別な任務が与えられているから、少なくとも、私たちはそれに対して敬意を表すはずで、ところが、この偽教師たちは、彼らのことを口汚くののしているのです。天使たちに対して屈辱的なことを言っていると云います。このような態度をもって彼らは歩んで来たのです。この偽りの教師たちのその信仰の土台となっていたものは「神のことば、神の教え」ではありません。自分たちの夢なのです。自分たちの勝手な考えです。「勝手な思い」が彼らの信仰の土台でした。だから、こんな愚かなことを平気で行っていたのです。自分たちの間違いに気付いていないのです。天使たちに対して大変傲慢なものたちでもあったのです。

そこで9節で、御使いのかしらミカエルと比較して、彼らの間違いを明らかにしています。9節「御使いのかしらミカエルは、モーセのからだについて、悪魔と論じ、言い争ったとき、あえて相手をののしり、さばくようなことはせず、「主があなたを戒めてくださるように」と言いました。」、この「御使いのかしら」という表現はこのミカエルだけに使われています。このミカエルという名は「だれが神のようであるか」という意味をもっています。名前が記されている数少ない天使の一人です。もう一人それは「ガブリエル」です。天使たちの中でこの二人だけの名前が記されています。

ダニエル書10：13「ペルシヤの国の君が二十一日間、私に向かって立っていたが、そこに、第一の君のひとり、ミカエルが私を助けに来てくれたので、私は彼をペルシヤの王たちのところに残しておき、」

ダニエル10：21「しかし、真理の書に書かれていることを、あなたに知らせよう。あなたがたの君ミカエルのほかには、私とともに奮い立って、彼らに立ち向かう者はひとりもない。」

ダニエル12：1「その時、あなたの国の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民で、あの書にしるされている者はすべて救われる。」

イスラエルの国の人を守る存在、非常に重要な天使です。しかも、最も力ある天使と言われています。「天使」と言った場合、これは良い天使のことです。罪を犯していない天使です。罪を犯した天使たちの長は悪魔であるサタンです。ミカエルは罪を犯していない聖い天使たちの中の最も力ある天使、御使いのかしらであると言います。

さて、このミカエルと悪魔とのやりとり、「悪魔と論じ、言い争ったとき、」と書かれていますが、果たして、そんなことが聖書に書かれてあるのでしょうか？少なくとも、私たちが見ることができるのは「モーセが死んだとき」のことです。申命記34章にはモーセが死んだときのことと、モーセが葬られたときのことと書かれています。申命記34：5、6「:5 こうして、【主】の命令によって、【主】のしもべモーセは、モアブの地のその所で死んだ。:6 主は彼をペテ・ペオルの近くのモアブの地の谷に葬られたが、今日に至るまで、その墓を知った者はいない。」、特に、6節をご覧ください。主がモーセの遺体をこのモアブの地の谷に葬られたと書かれています。実は、この「主」と訳されていることばは三人称単数で「彼」とも訳せます。ですから、多くの学者たちの間で「主」と訳すべきか「彼」と訳すべきか、それぞれの言い分があります。恐らく、この6節で「主」で訳されていることばは「天使」を指しているのでしょう。

なぜ、そう言えるのか？今見ているユダの9節です。御使いミカエルがこのモーセのからだの埋葬に関わっていたようです。モーセのからだを葬ったのは、この御使いのかしらミカエルだろうと言えます。なぜ、このような方法を神がお取りになったのか？普通は、人々によってその遺体は葬られたはずで、でも、モーセの場合は別でした。恐らく、考えられることは、イスラエルの人々にとってモーセは民族としてもまた霊的にも大変偉大なリーダーでした。彼らは彼を尊敬する余り、彼のからだを人々の信仰の妨げになってしまうことを案じてこの葬りを神はミカエルにお任せだったので、もし、

モーセのからだがあれば人々はそれを崇めてしまう可能性があるからです。申命記34：6で言われていることは、ユダの手紙9節に出て来るミカエルによってこのようなわざがなされたということです。

皆さんに考えていただきたいのは、ユダがこのように教えてくれたように、モーセのからだについて「悪魔と論じ言い争った」とあるところです。確かに、旧約聖書の中を見てもそのようなことは記されていません。モーセの死に関しては今挙げた箇所だけです。でもユダはここで「論じ合った、言い争った」と書いています。恐らく確実なことは、この話は読者たちに広まっていたのです。だから、ユダも敢えてこのことをここに挙げているのです。そうでなければ説明を加えるでしょう。ユダはこのことを余り説明していません。というのは、この話は読者たちの間でよく知られていたということです。人々はどこからこれを知ったのか？一つ言えるのは「伝承によって」、書かれたものではなく、ことばによって広まったのではないかと、ヒーバーという先生はその可能性があると云います。

また、こういう説もあります。それは「外典による」というものです。「外典」とは、正典という今私たちが持っている聖書ですが、ここに入れられなかった書物があつてそれが外典と言われているのですが、その中に「モーセの昇天」という外典があります。パークレーは恐らく人々はそこからこの話を知ったのだろうと云います。パークレーによれば「この『モーセの昇天』にはその死体を葬る役目が天使の長ミカエルに与えるという話が付け加えられている。悪魔とミカエルとの争いに関しては二つの理由を挙げている。悪魔はモーセの死体の所有権についてミカエルと言い争った。悪魔は二つの理由を挙げたのである。モーセの死体は物質だ。物質は悪でありそれは自分の領域に属するからモーセの遺体は自分のものだと言い張った。第二に、モーセは殺人者だ。彼はエジプト人がヘブル人を打つを見てエジプト人を殺したではないか。そして、モーセが殺人者なら悪魔はその死体を所有できる。」と、これは外典の中に記されています。恐らく、このようなことが知られていたので、ユダはそれを引き合いに出しているのです。

私たちがこの聖書から知ることができるのは、先程も見た申命記の中で御使いによってそのからだは葬られたということです。そして、34：6に「その墓を知った者はいない。」と書かれています。この「者」はヘブライ語で「意志」ということばを使っています。つまり、「人」という意味です。つまり、モーセがどこに葬られたのか、人はだれも知らないと書かれています。こういう書き方をしているのは、「恐らく、人間は知らないけれど、それを知ったものがある。」と見ることができるのです。今、私たちが見て来たことは「悪魔は知っている」のです。そこでミカエルとの間で言い争うのです。悪魔にしてみるならモーセのからだを使って人々を惑わすことができるのです。人々を惑わし、罪への誘惑を試みることは可能であるわけです。恐らく、それでこのミカエルと云い争ったと、このユダ9節で言っているのはそういうことだろうと、私たちは推測することができます。

◎ミカエルの悪魔に対する態度

皆さんに見て頂きたいのは、そのことではなく、ミカエルがどのようにこの悪魔に対応したかです。それがここでユダが言いたいことだからです。9b節「…あえて相手をののしり、さばくようなことはせず、「主があなたを戒めくださるように。」と云いました。」と、これがミカエルがサタンに対して口にしたことばだったのです。この箇所を直訳すると「彼はののしりのさばきを宣告すること、もたらすことをあえてしなかった。」です。つまり、ミカエルはサタンに対して「罪を犯したおまえは永遠の滅びに至って…」と、そのようなことを宣言しなかったのです。ミカエルはののしることをしないで、「主があなたを戒めくださるように。」と云いました。実は、このことばはゼカリヤ3：2から引用されているのです。ゼカリヤ3：1「主は私に、【主】の使いの前に立っている大祭司ヨシュアと、彼を訴えようとしてその右手に立っているサタンとを見せられた。」と、「私」とは預言者ゼカリヤのことです。3：2「【主】はサタンに仰せられた。「サタンよ、【主】がおまえをとがめている。エルサレムを選んだ【主】が、おまえをとがめている。これは、火から取り出した燃えさしではないか。」、ここでは「【主】がおまえをとがめている。」と訳されていますが、これはユダの手紙9節の「主があなたを戒めくださるように。」と同じことです。

ミカエルがこの論争にどのように終止符を打ったのか？偽りの教師たちは御使いたちに対して全く敬意を払うこともなく悪口を言って中傷していた、ののしっていました。しかし、御使いミカエルはサタンに対して彼らと同じようにののしってはいません。すべてを神に任せました。ですから、ミカエルは「あえて相手をののしり、さばくようなことは」しなかった。つまり、彼はどんな時にでも罪を犯すことがなかったのです。そして、すべてのことを神に任せました。少なくとも、ミカエルもこのサタンが神によって造られたことを知っています。大変大きな罪を犯したことも知っています。そして、この言い争ったときにもサタンをさばくようなことをしないで、すべて神にお委ねになったのです。

偽教師たちは神から特別な務めをいただいている天使たちを口汚くののしっています。でも、御使いのかしらミカエルはサタンに対してそのようなことは行っていません。こうして、ミカエルと偽教師たちがどのように御使いたちを扱ったのか、そのことを比較して、偽教師たちがいかに傲慢なのかという

ことを明らかにしているのです。このことによって、サタンとの論争にピリオドを打ったのです。非常に賢明です、皆さん。お気付きになりますね、さすが御使いのかしらです。どんな会話がなされたかは記されていないので分かりませんが、少なくとも、ミカエルは決してどんな時でも神の前に罪を犯すことはなかったのです。それに比べて、この偽教師たちはこのような罪を平気で犯し続ける者たちです。

4. 彼らは本能によって生きる者 10節

彼らに関して「彼らは夢見る者であった」とユダは言いました。同時に、10節を見る「彼らは本能によって生きる者たちだった」と記しています。「しかし、この人たちは、自分には理解もできないことをそしり、わきまのない動物のように、本能によって知ることからの中で滅びるのです。」と。「自分には理解もできないことを」とは、「彼らは何をしているのか分からない」ということです。今、私たちが見て来たように、彼らは情欲に従って生きているし、奴隷として生きているし、そして、神を軽んじて神に従おうという思いは微塵たりともないし、そして、御使いたちに対してもこのような傲慢な態度で彼らの悪口を平気で口にする、そのような者だとユダは言うのです。「この人たちは何も分かっていない。まさに、動物のようだ。彼らはこう生き方、歩みを通して彼ら自身の無知さを露呈している。」と。

まさに、ここに書かれてあることが、先ほどから何回も振り返っているⅡペテロ2：10-13に書かれています。「10 汚れた情欲を燃やし、肉に従って歩み、権威を侮る者たちに対しては、特にそうなのです。彼らは、大胆不敵な、尊大な者たちで、栄誉ある人たちをそしって、恐れるところがありません。11 それに比べると、御使いたちは、勢いにも力にもまさっているにもかかわらず、主の御前に彼らをそしって訴えることはしません。12 ところがこの者どもは、捕らえられ殺されるために自然に生まれついた、理性のない動物と同じで、自分が知りもしないことをそしるのです。それで動物が滅ぼされるように、彼らも滅ぼされてしまうのです。13 彼らは不義の報いとして損害を受けるのです。彼らは昼のうちから飲み騒ぐことを楽しみとと考えています。彼らは、しみや傷のようなもので、あなたがたといっしょに宴席に連なるときに自分たちのだましごとを楽しんでいるのです。」、ユダの9節ととても類似しています。わきまのない、理性がない、分別ができない、動物のように…、何が正しいか分からない。まさに、そのような存在だと言うのです。

「本能のままに」、生まれつきの性質です。だから、彼らは何が正しいのかを知って正しく行動するのではない。彼らは生まれつきそのまま、本能の赴くままに行動しているのです。彼らのその行動を支配しているのは肉欲、情欲なのです。神のみことばに従って生きるのではなくて、自分の欲望のままに生きる、まさに、動物と同じだと言います。だから、彼らには神のさばきがあると言います。パウロはこのように言っています。ピリピ3：19「彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。」と。この偽教師たちは滅びると言います。

これがユダが読者たちに与えた、また、警告したメッセージです。偽教師たちはどのような者たちなのか？彼らはどういうことを行っているのか？彼らの行ないの背後にある思いとはいったい何なのか？何が彼らをそのように駆り立てているのか？そのすべてをこうしてユダは明らかにするのです。

悲しい現実には、この人たちは神を拒んだ者たちです。彼らは益々罪の深みへと沈んでいきます。そして最後には、彼らに永遠のさばきが下ります。彼らに罪の精算がなされるその日がやって来るのです。こうして今日もユダは「だから、信仰者の皆さん、しっかり真理に立ちなさい。」と繰り返してそのことを伝えてくれます。私たちに必要なのはこの「神のことば」です。これが私たちに必要なのです。これだけでいいのです。しっかり真理に立ち続けなさいと。

もし、この中にイエス・キリストの救いがまだ分かっていない人、救いに与っていない人がいるなら、神の警告はあなたに対する恵みのメッセージです。神はまだあなたに悔い改めの機会を備えてくださっています。手遅れになる前に、あなたはこの救いを求めて出て来ることです。必ず、罪に対してはその報いが伴うこと、そのことをみことばは警告し続けています。罪から離れることです。神に背く生き方から離れて、この真の神を信じて救いに与ること、そのことを心からお勧めします。